

ふるしき先生 UD な授業チェックリスト

20140708 版 (©涌井恵：国立特別支援教育総合研究所)

●授業の骨格づくり

- 授業のねらいが明確である。つまり、子どもに求めるできた姿、わかった姿が明快に定義されている（目に見える行動、数えられる行動の記述のレベルまで落とし込む）。
- 最低（2つまたは）3つ以上の学び方を選べる課題や教材が用意されている。→（MI & やる・き・ちゅ授業づくり曼荼羅）

●教師側のこと（UDL 原則 1：教師や教材によって「伝える」ことについて）

- 教師や教材（プリントなど）が伝える情報は、様々なマルチ知能によってアクセス可能か（例：文字だけでは分かりにくい子どものためにイラストが添えられている。文章での説明や動画での説明と複数用意されている）
- 教師や教材（プリントなど）が伝える情報に、注目できるよう「やる・き・ちゅ」の観点からの工夫がなされているか。

●子ども側のこと（UDL 原則 2：子どもが自分の考えなどを「表現する」ことについて）

- すべての子どもが自分の考えなどを「表現する」機会が十分にあるか。
- その子どもが「表現する」手段は、様々なマルチ知能を活用できるようになっているか。（例：話す、書くに偏っていないか）
- 自分に合った考え方や学び方（マルチ知能）ができるような課題や教材が用意されているか。

●子どもの意欲・学習態勢（UDL 原則 3：子どもが「意欲的に取り組み続ける」ことについて）

- やる・き・ちゅ（やる気、記憶、注意）についての工夫は考えてあるか。
- 記憶や注意が難しい場合の補う手段は用意されているか（例：衝動性を押さえるための発言カード、作業記憶を補うための計算の手順カードなど）。
- 子ども同士上手く関わったり、協同したりするためのスキルを発揮できる工夫がなされているか。
- 子ども（同士）を認めたり、ほめたりする場面設定があるか（例：「わからない」と言えたことを価値づける。個人作業だけでなく、協力したり学び合えたりしていることをほめる。個人随伴性 \leq 集団随伴性）。